中沢新一、長谷川祐子が読み解く

# ヤン・ファーブル『わたしは血 JE SUIS SANG』

来年2月に彩の国さいたま芸術劇場で公演が予定されている、ヤン・ファーブルの『わたしは血 JE SUIS SANG』は、観る者に様々な思いを想起させる衝撃的な作品。詩人であり美術家でもあるヤンのこの作品をどう捉えるか。
前作『主役の男が女である時　Quando l'uomo principale é una donna』で来日した時に行われた公開鼎談「talk talk talk」から、人類学者の中沢新一氏、キュレーターの長谷川祐子氏の見方に加え、ヤン自身の言葉で問題作に迫る。

©Wonge Bergmann

## 中沢新一

### 芸術人類学とほとんど似た結論に至ろうとしている

ヤン・ファーブルさんの昆虫を使った美術作品が非常に興味深いのは、昆虫は身体の回りに甲冑をつけている生き物で、甲冑の中は人間以上にどろどろの内臓が入っているということです。人間の場合は甲冑をつけるがその下に皮膚があり、通常の身体をその甲冑が守っている。中世の騎士はそれで戦うのですが、騎士のあり方というものにも非常に僕は引かれるものがあります。ヤンさんとは、5年前に丸亀市の猪熊弦一郎現代美術館で展覧会をなさった時に対談しましたが、その中で、「私はとても古めかしい考え方をする人間である。そして今の作品の冒頭にも、中世と現代はそんなに違いはなく同じなんだ」というメッセージが出てきました。

芸術人類学では「人間は中世と今は違いがないどころではなく、旧石器時代からあまり変わりがないのではないか」というのが、僕の考えなのです。中世の時代は人間の本質をすごく露わにしました。僕らの世界では死ということをわりと表にださずに隠してしまいますが、中世は生きている隣に死神がいて、騎士達は昆虫のような身体に身を固めて戦うわけです。戦えばやはり死にます。中世では生と死は本当に身近に行き来していて、身体自体も今の僕らが考えているよりはもっとダイナミックなことを考えていたようです。

人間は昆虫のように変化していくものだし、甲冑を身につけることは単なる防衛のためではなく、昆虫のように人間が変わっていくということを意味していたようです。人間と動物、生きていることと死んでいることがすぐ隣り合わせになっているような時代で、しかもこの時代を考えるということは、もっと昔を考えていいと思っています。人間がこれから向かっていく先に、人間の身体、神経組織、体液が一体どういう形に変わっていくだろうかという事を考える時に、一番いいモデルを与えてくれるのが中世なのです。

中世は古代と近世の間に挟まれた時代だが、古代も近世もこういう生と死の接近は起こっていないのです。今僕らが未来に向かって人間の存在がどういう形に変わっていくかと考える時に中世の事を考えるとすごくインスパイアされることが多いのです。それが昆虫であったり、昆虫のような騎士であったりするということをヤンさんが芸術の中心テーマに据えていて、僕の考えていることと大変親しいものを感じました。

今度の『わたしは血 JE SUIS SANG』という作品はそういう側面がかなり表面に現れていて、私は血である。体液であって、多分それは神経組織、筋肉組織だけになって、さらにほぐれて神経組織だけになっていき、そしてその神経組織と寄り添うように走っている血管やリンパ腺の中を走っている液体になったりし、そうして人間の身体がどんどん神経組織や体液に変化していく状態を作り出そうとしているのです。

僕はそれをかなり昔の時代の事から考えようとしているが、ほとんど似たような結論に至るかもしれないというのはとても関心が深いアーティストなのです。

**SHINICHI NAKAZAWA**

中沢新一

1950年山梨県生まれ。東京大学大学院人文科学研究科宗教学専攻博士課程単位取得満期退学。1979年よりネパールに赴きチベット僧につき密教の修行を積む。現在、多摩美術大学教授。同大学芸術人類学研究所所長。著書に『チベットのモーツァルト』(サントリー学芸賞受賞)『森のバロック』(読売文学賞受賞)『哲学の東北』(斎藤緑雨賞受賞)『芸術人類学』など多数。

## 長谷川祐子

### 「永遠と現在」「日常と非日常」「身体と別の身体」をトランス

私が最初、ファーブルさんを知ったのは、1993年に水戸芸術館にいた時に企画した「アナザーワールド・異世界への旅」という展覧会でした。そこでは「青」がテーマでした。アナザーワールドとは「あの世」という意味ですが、あの世の展覧会を作りたいと思いました。アーティストは私たちが親しんでいる日常を非日常の世界に連れて行くという精神的な旅のナビゲーターのような存在と考えた展覧会だったのです。

ファーブルさんの巨大なドローイング、本当に皆さんにお見せしたいのですが、このステージの幕を横断するくらい大きく、高さも10 mぐらいあるようなその大きなシルクの布にファーブルさんがビックのボールペンでドローイングを書かれるのです。それは彼が自動記述のような形で、自分の無意識を開放していくような状態で描かれたすばらしい緻密なドローイングでした。それは「青の時間」と題されており、そのドローイングを展覧会にもっともふさわしいものとして展示したいと思っていたのが最初の始まりでした。

また、昆虫がファーブルさんのテーマの1つです。例えばスカラベという虫なのですが、何千年も前から同じ形を維持している。変容するもの、昆虫は変態していくわけですが、変化する生命の象徴として自分の彫刻の素材として使っています。そこからも「永遠と現在」、私たちの「日常と非日常」、そして私たちの身体と全く別のものの身体を繋げていくという事で、彼は違う世界をトランスしていく人として私は興味深く一緒にお仕事をしてきました。

**YUKO HASEGAWA**

長谷川祐子

京都大学法学部卒業。東京藝術大学大学院美術研究科修士過程修了。水戸芸術館、世田谷美術館、金沢21世紀美術館で学芸員を歴任後、現在は東京都現代美術館事業企画課長、多摩美術大学芸術学科研究室教授。手掛けた展覧会に「アナザーワールド・異世界への旅」(1992-93年、水戸芸術館現代美術ギャラリー)「マシュー・バーニー:拘束のドローイング」(2005-06年、金沢21世紀美術館)など多数。

## ヤン・ファーブル

### テクノロジーの支配を拒否し、自分の肉体に立ち返る

初演は2001年ですが、最初にこのパフォーマンスについて考え始めたのは70年代の事です。その頃は自分の身体について非常に興味を持っていました。例えば自分の血を使って絵を描いたりして、自分の身体に対する探求がこの頃に始まったのです。この『わたしは血 JE SUIS SANG』というテキスト、マニフェストのようなものが出来たのが1995年の事で、そのマニフェストの中では「血」というものの重要性を考えていました。そこでは「血」というのは我々にとっては非常に重要な液体であるという以上に、さらに命の力のようなものの象徴でもあります。血の重要性を再確認することによって、我々は新しい肉体を作っていくことが出来るのではないか。すなわち我々が現在もっている肉体のあり方からさらに一歩前進した未来の肉体というものを作り上げることが出来るのではないかという事を考えていました。それは例えばキリストの精魂といったようなイメージから発展しているようなわけです。さらに人間と動物という関係についても考えました。人間と動物の血が混ざり合うといったようなイメージを考えていました。

全体としてはこのマニフェストは自分の身体、肉体というものが持つ価値であるとか、重要性といったものに立ち返り、そのテクノロジーによる支配を拒否するという事が中心的なテーマになっています。例えば作品中の振り付け、俳優やダンサーの動きは、古典時代のフランスの絵画からとったものです。例えば聖人を描いたような絵画を参考にしています。このパフォーマンスは鎧を使ったダンスで始まりますが、鎧というのは身体を覆って保護する物であります。このパフォーマンスが進むにつれて、鎧とか人間を覆っている皮が剥がれて落ちていくということになり、最終的には人間の身体は全く空になってしまいそこに現れてくるのが新しい未来の身体、血で作られた身体ということになるのです。

**JAN FABRE**

ヤン・ファーブル

1958年ベルギー生まれ。アントワープ王立美術アカデミー卒後、アーティスト活動を開始。ダンス、オペラ、造形美術、演劇と美術の境界を横断するパフォーマンスなど多岐にわたる前衛作家として世界的に高名。主な作品に、'84年、ヴェネツィア・ビエンナーレで発表した『劇的狂気の力』『わたしは血』(2001年)『タンホイザー』(2004年)など。

ヤン・ファーブル　テキスト・舞台美術・振付　NEW

**『わたしは血　JE SUIS SANG』～中世妖精物語～**

人間の本質は、中世以来、変わっていない！「血」をテーマに描き出される人間の本性。ヤン・ファーブルが、美術家としての才能を遺憾なく発揮した舞台は、どのシーンをとっても絵画のように美しい。アヴィニョン演劇祭を震撼させた衝撃作品だ。

【日時】2007年2月16日(金) 開演 19:30
17日(土) 開演 16:00／18日(日) 開演 16:00

【会場】彩の国さいたま芸術劇場 大ホール

【演目】『わたしは血 JE SUIS SANG』～中世妖精物語～　【テキスト・舞台美術・振付】ヤン・ファーブル

【出演】俳優、ダンサー、ミュージシャン 23名

【チケット(税込)】　一般 S席7,000円　A席5,000円　学生 A席3,000円
メンバーズ S席6,300円　A席4,500円

【発売日】メンバーズ 11月25日(土)　一般 12月2日(土)

photo:幸田 森(portraits)　構成: 鴨澤章子